

多木浩二著 『戦争論』(岩波新書 1999年) 第一・二章

合同ゼミ報告、1999/11/21 土肥勲嗣(九州大学法学部4年、石川ゼミ)

- 著者の問題提起: 「戦争とは、政治、経済、文化等々がからみあっている歴史的な文明の構図のどこかが崩壊したことではないか?」(序章 P5)

第一章 近代の戦争

- 国民国家と戦争

暴力の独占

開戦の決定(政治的) 戦闘の過程(暴力) 終結(政治的)

ナショナリズム 聖戦・愛国心

「戦争はひとつの決定的な言説、その根拠があるのかどうかも不明なのに確実な実体に見えるような言説空間を基盤にして発生し、展開するものなのだ。」

- 近代以降の戦争観

	人名/著書	言説
国民国家	カント 『永遠の平和のために』(1795)	戦争状態は、人間性に反する自然状態 平和状態の創設
	クラウゼヴィッツ 『戦争論』 (1832-34)	暴力行為「戦争とは一種の強力行為であり、その旨とするところは相手に我が方の意志を強要するにある」 政治の継続(政治の道具) 合目的化 「戦争は政治におけるとは異なる手段をもってする政治の継続にほかならない」
第一次大戦後 (戦争理論の 限界)	シュミット 『政治的なものの 概念』(1927)	政治の前提 政治を条件づける 「現実可能性としてのつねに存在する前提なのであって、この前提が人間の行動・思考を独特な仕方規定し、そのことを通じて、とくに政治的な態度を生み出す」 「人類そのものは戦争をなしえない」
	ベンヤミン 『暴力論批判』 (1921)	あらゆる暴力の根源 「他の暴力に比して戦争暴力は途方もなく大きく、根本的である」 国家の法によって発現した極限の暴力 暴力 = 戦争の廃絶は国家の廃絶 「互いに依拠しあっている法と暴力を、つまり究極的には国家暴力を廃止するときこそ、新しい歴史的時代が創出されるのだ」
	ヒトラー	戦争のための戦争 軍隊国家の建設、第二次大戦(絶対的戦争)へ

第2章 軍隊国家の誕生 近代日本

・近代化の過程（百年戦争）

西暦	事件	背景	特徴
1868	明治維新		
1872	徴兵制の確立	士族の反乱・農民一揆の制圧	<西欧との相違>
- 73	征韓論		・ 最初に暴力を合法化
1874	台湾出兵	軍隊をモデルとした国家	・ 天皇が主権者で国民は主権者ではない
1877	西南戦争	「維新後の専制官僚は、民主的な政体をもつ真の近代化を選択するどころか、ひたすら西欧列強に伍することに国家の目的をおき、自由思想を排除した」	<規律・訓練 BY フーコー>
1889	大日本帝国憲法（欽定憲法）発布		学校、工場、修道院などあらゆる場で制度を成立させる仕組みとして発現。日本の場合、それは軍隊であった。
1890	教育勅語公布		個別化と（主体化ではなく）臣民化が進んだ。
1894	日清戦争		
- 95		富国強兵（徴兵制 + 軍需産業）	
1904	日露戦争		
- 05		拡張主義、植民地主義	
1910	韓国併合		
1918	シベリア出兵	軍国的ナショナリズム	
1925	治安維持法・普通選挙法成立	「国民は日本がアジアの最強国になったという自覚をもち、日本は外征して国威を発揚する国家だと思いはじめた」	・ E.H. ノーマン『日本の兵士と農民』
1931	満州事変	戦争が自然状態	天皇の軍隊は奴隷軍隊
1933	国際連盟脱退		
1937	日中戦争		
	南京大虐殺事件	天皇制ファシズム	・ 飯塚浩二『日本の軍隊』
- 45	終戦	（「戦争機械」+「国家装置」）	日本の敗北は精神の敗北 日本人の精神は近代化していなかった

<参考文献>

- ・ 西谷修著『夜の鼓動に触れる 戦争論講義』（東京大学出版会、1995年）

論点「20世紀において戦争はどのように変化してきたか？」

結論...まとめることが困難なため図解によって示す。

	期間	対立	様態	予見可能性
< 近代化 > 戦争回避は不可能 第二次大戦後の枠組みと現在の紛争近代化による包み込みの無理	< 大戦期 > 第一次大戦 第二次大戦	国民国家	身体同士の戦闘	(以前) 予見可能 (季節、規模、参加者等) 予見不可能 (技術の発達、目的の抽象化)
	< 冷戦期 > 朝鮮戦争 ヴェトナム戦争	自由主義 VS 社会主義 中ソ路線分離		
	< 冷戦後 > 湾岸戦争 ユーゴ・コソボ紛争	< 介入戦争 > 多国籍軍 NATO 軍	人間不参加の戦闘	予見可能 (事件解決可能、示威の効果は期待可能)

戦争論 第三章 死と暴力の世紀

報告：平井ゼミ 櫻井 瞳

1. 暴力に直面した二〇世紀

日常生活を破壊する戦争

われわれは理性なり感情なりに従い、自らの生き方によって世界への住みつき方を決めている。

住みつき方 = 日常性... 国家や法に束縛され、近代技術に影響され、ルーティン化されたスタイルを持っているが、人々にとってなにものにも替えがたい価値がなお残る。

その価値とは文化であり、社会的な認識はそこに根ざしており、認識が壊れると社会的な秩序は崩壊し始める。

戦争という暴力は国家や軍隊にだけ降りかかるのではなく、この日常性をも破壊する。

アウシュヴィッツの経験は、まず人々から日常性をはぎとることであった。

そのとき人間は人間性を喪失し、「世界」を失ってしまった。

二〇世紀ではなぜこれまで味わった事のないような暴力が世界を襲ったのか？

.....ひとつは近代技術が異様に発達したからであり、もう一つは政治権力の様態が変わったからである。

暴力を予感する芸術

二〇世紀の世界には、戦争暴力は潜在していた。この潜在している危機に敏感に反応するものが芸術である。芸術家は日常世界の枠組みから逸脱したところに視点をおいているだけに、直接戦争について語るか否かはともかく、そうした暴力を察知する感受性を持つことができた。

【例】第一次大戦前 未来派の戦争賛美

第一次大戦前後 ダダイストの活動

一九世紀の終わりから二〇世紀にかけ芸術形式がさまざまに変化したのは、芸術家たちが世界の中に秘めていた非合理的かつ根源的な混沌に直面していたからであり、その芸術の中に理性的世界が解体されていく過程がみえてくる

【死と破壊を予感させる芸術の例】

ロシア・バレエ団...第一次大戦前ヨーロッパを中心に活動

『春の祭典』...一九から二〇世紀への転換期を象徴

戦間期...第一次大戦の後遺症、ヒトラーの登場、スペイン内戦

シュルレアリスム、マックス・エルンスト、サルバドール・ダリ、アンドレ・マソン、
ジョアン・ミロ、マックス・ベックマン

二〇世紀は真にカタストロフィックな世界だった。アウシュヴィッツとヒロシマはベンヤミンが「比喩を絶する作用力」と呼んだ暴力に相当する。ベンヤミンの言う「暴力の歴史の哲学」は実際にはどのように行われるべきものであるか？

2. ガスと炎 ホロコースト

「最終解決」

ユダヤ人に対する迫害は、ヨーロッパ内では二千年も続いてきた最も強い人種差別であったが、この差別を国家ぐるみに一民族の完全な絶滅にまでエスカレートさせたのは、ナチのみなしえたことであった。

1938年、ユダヤ人少年がパリ駐在の外交官を殺害したのをきっかけに、水晶の夜と呼ばれる暴行が起こった。しかし、この時点ではヒムラ - 率いるSS（親衛隊）は関与していなかった。

【ホロコースト実行の経過】

ラウル・ヒルバークの『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』によると、1933年ナチが政権を掌握した時はまだ、絶滅計画には到達していなかった。

たんなる虐殺と絶滅とは違う

ユダヤ人絶滅計画へのステップ

「ユダヤ人」という概念が確定 財産収用 ユダヤ人のゲットー収容 ヨーロッパ・ユダヤ人の抹殺決定 移動殺戮部隊ロシアへ派遣、その他のところでは犠牲者たちは絶滅収容所移送
この順を追った発展は、気味悪いほど行政的な機構の活動であるが、次第に非公式になり手続きが省略されるようになって過程は一挙に進んだ。

近代的なシステムと野蛮な暴力を結合するきっかけ

ベルトコンベア - 的な殺害

アウシュヴィッツ……絶滅収容所の一つ。

ユダヤ人をガス室で殺戮し、焼却炉で焼いてしまうという、近代的な工場システムのように行われていた。

絶滅収容所

「二〇世紀西欧社会の内部に住むあるひとつの人間集団全体をそっくり全滅させるための、意志的で、体系的で、産業的に組織され、大規模に成功をみた試み」

(ソール・フリードランド -)

死を生産する近代的な工場システムのように実施

虐殺あるいは戦場での殺戮と絶滅の違い

絶滅収容所には、長い移送に疲れ果てた無抵抗のユダヤ人がいるだけで、戦場で相まみえる敵がいるのではない。

『物』

「絶滅」とはこうした材料を放りこみ、「死」という生産物を取り出す工場システムになりえたのだ。

こうした絶滅計画の全体は「ユダヤ人問題の最終解決」といわれた。

ユダヤ人の死

ユダヤ人問題が二度と問題にならないようにユダヤ人排斥の歴史に究極的な解決を与える

殺人企業としてのSS

SS……ただの暴力的集団というわけではなく、行政的にはナチ・ドイツの軍需企業体系の中で重要な役割をもった経済的管理機構でもあった。

SSの管轄であった強制収容所はもともとは、反体制派を保護検束する場所であったが、労働力の供給源へと変化していき、政治的な意味より経済的な目的を持つようになった。

しかし、この労働とは奴隷労働であった。アウシュヴィッツは、その他の収容所とは違い、一方では労働力を供給する収容所であり、他方では産業的方式で人間を抹殺する絶滅収容所であった。

その実態 「アウシュヴィッツは公的な虚構のなか以外では労働キャンプではなかった。そしてガス室と火葬炉は武器ではない」(ラク - =ラバルト)

なぜアウシュヴィッツだったのか？

中部ヨーロッパの交通の要塞にあたる位置をしめており、SSは軍需産業の生産を拡充しようとしていたから。

アウシュヴィッツは労働の供給と大量殺戮のバランスをとっていたが、劣悪な労働環境であったため、結局核心は、ユダヤ人を殺戮するところであり、その死体を焼く為の焼却炉こそがアウシュヴィッツの究極の装置であった。

戦争と絶滅

ユダヤ人は殺される為だけに、アウシュヴィッツに鉄道で移送され、到着したときにはすでに衰弱しきっていたが、列車から降りると選別され労働に適さないとされたものはガス室へ送られ焼却された。

資本主義的生産では労働は価値を生み出すものであるのに対し、アウシュヴィッツその他の強制収容所ではゼロしか生み出さなかった。

ナチによるユダヤ人虐殺それ自体は戦争ではないが、戦争によってそれは急速に現実化した。ナチの戦争は「戦争のための戦争」であるとはいえ、ドイツ民族の勝利を目的としている以上、ジェノサイドはその一部であった。

ひとつの国民、あるいは民族集団の絶滅

3 . アウシュヴィッツ後の言説

啓蒙的理性の挫折

マックス・ホルクハイマーとテオドール・アドルノ

共著『啓蒙の弁証法』

彼らは、啓蒙が人間を自由にするどころか、反対に人間を野蛮に追い込む時代にわれわれが直面していることを認識した。近代の科学技術から生まれた破壊が言語を絶する異常な規模になったとき、それは啓蒙的理性ではなだめようもない暴力になったのである。

テオドール・アドルノ『文化批判と社会』
「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」

プロメテウスの恥辱
ギュンター・アンデルス（ユダヤ系ドイツ人）

アウシュヴィッツにおけるユダヤ人の虐殺が、ナチ・ドイツの特殊性であるが、それ以上に資本主義とともに発達した近代技術が人間にとって普遍的な問題を投げかけている事に注目。ハイデッガーの技術論を批判し、近代のテクノロジーは一九世紀に支配的だった進歩への信仰の弁証法的転覆として「プロメテウスの恥辱」を生み出したと言う。

絶滅計画に関わる人びとは、自分は「手を汚さない仕事」をしているようにしか感じなかった。絶滅は現実に事実であったし、悪行であったが、それらを遂行した人々には業務であった。

アンデルス：実行する側の倫理学を考察

産業社会に生まれ育った人間として、彼らは大量殺戮を通常の産業における労働と同じように仕事としてこなしていた。

アウシュヴィッツほどの暴力の行使であっても、誰も手を汚した意識なしに殺戮に加わったのだ。

近代の権力とジェノサイド
ミシェル・フーコー...ジェノサイドが起こる条件を、権力と生命の問題として取り上げた。

権力はもはや、かつての専制君主のように生殺与奪の権に至高の権威を見出すのではなく、人々の生をくまなく取りこみ「勘定高く」経営・管理することによって成立するようになる。

近代の戦争を可能にしたのは、政治の内部で、生そのものが問題とされるときであったのだ。

民族絶滅の特殊性は、その犠牲者たちが、彼らが彼らそのものである事によって死なねばならないことをさしている。

死なせるか生きるままにしておくという古い権利に代って、生きさせるか死の中へ廃棄するという権力が現れた。 (フーコー)

これがアウシュヴィッツの駅で生じていたガス室送りと労働可能者の選別である。

4. 戦争と近代技術

第二次世界大戦では、核兵器というこれまでの兵器とは次元の異なる破壊力を持つ兵器が登場した。できあがった原爆の破壊力は大きく、そこから放出される放射能は人体に強い影響をもっていたので、このような爆弾を使用しているかどうか疑問が出されたが、日本が行ってきた戦争行為の卑劣さなど

のため同情論は消え、広島・長崎に投下された。しかし、非常に大きな破壊力をもつ超越的な兵器を、日本を降伏させるためだとしても使うべきだったのだろうか？核を使用した理由は、ひとつはソ連参戦の前に日本を降伏させたかったということもできるし、日本という白人ではない民族だったからということもできる。あたかも、日本が奇妙に被害者であるかのような錯覚が生まれているが、太平洋戦争は日本が始めたことであり、日本はアジア各地で戦争犯罪を続けたことを認識しなければならない。

アンデルスはアウシュヴィッツとヒロシマとともに、人間の生命は抹消されていいというおそろしい一歩を歴史の中に踏み出してしまったと見て、戦争はもはや戦略的な活動ではなく、技術的な過程になってしまったという。

戦争は経験したものでないといけないというのが、歴史を学習し、その意味を考えることはできる。それが歴史の現在を生きることである。

(感想)

この本を最初に読んだとき、何が言いたいのか全くと言っていいくらい理解できなかった。哲学者の事も知らなければ、アウシュヴィッツも知らなかった。私は、ただヒトラーはまれにみる変わり者で、非情な人間だったからユダヤ人の大量虐殺が行われたのかと単純に考えていた。しかし、そうさせたのは近代技術であり、近代的システムであった。今までもユダヤ人に対する差別はあったのに、絶滅という決着方法が浮かび上がらなかったのは、それができる手段がなかったからで、発達してしまった技術はそれを可能にしてしまった。人間の生命を物のように扱い、奪う人びとはそれを罪と感ぜず、仕事としてこなす事ができていたのは機械的であったからといわれても、あまり私には理解できる心理ではない。今でも世界の色々なところで、民族紛争がおこっているようであるが、道を間違えば一民族の絶滅につながる可能性は十分あるということに気づかされた。

(疑問点)

- ・虐殺と絶滅との違いがよく理解できない。絶滅も虐殺ではないのか？
- ・ユダヤ人排斥の歴史に究極的な解決を与えること(P 1004行目)とあるが、究極的な解決とは何か？
- ・「アウシュヴィッツは公的な虚構のなか以外では労働キャンプではなかった。そしてガス室と火葬炉は武器ではない」(P101最後)とあるが、この比喻のなかに意味しているものは何か？
- ・「やがて社会全体にわたって生産にも……グロテスクな状態で予告していたのかもしれない。」(P104、8行目)とあるが、アウシュヴィッツ以後のゼロの時代というのはいつの時代なのか？

(語句)

- ・ルーティン化……慣例化

- ・標榜・・・主義主張をかかげ表わす事
- ・渾然・・・すっかりとけあって区別がないようす
- ・カタストロフィック・・・破局、悲劇的な
- ・ホロコースト・・・大規模な破壊、殺人をあらわす。今日では、主にユダヤ人(600万人)への大量虐殺表現することば
- ・ゲットー・・・ユダヤ人居住地域
- ・殲滅・・・全滅
- ・ジェノサイド条約・・・集団殺害罪の防止及び処罰に関する条約。
- ・弁証法・・・自己のうちにある矛盾をみずからの発展によってなくして、あたらしく総合された統一に到達する論理。
- ・プロメテウス・・・ギリシャ神話の英雄。天から火を盗んで人類に与えたため、罰として鎖でつながれた神。
- ・勘定高い・・・金銭の計算が細かくて、けちけちしている。
- ・ファシズム・・・第一次大戦後、イタリアのムッソリーニを中心とした右翼的独裁政治とその主義・運動。対内的には暴力的手段で民主主義的自由を奪い、対外的には帝国主義的侵略主義を主張するもの。

「戦争論」第4章および第5章

湯川 修平(鹿児島大学法文学部4年、平和ゼミ・木村ゼミ所属)

第4章 冷戦から内戦へ

1 冷戦というパラダイム

歴史家ホーブズボーム・「明らかに新しい型の帝国の時代」

)ひとにぎりの国々、伊、英、仏、独、米、日本がアフリカおよび太平洋地域を分割・支配

)先進国と後進国に分割 国家的膨張のひとつの段階

)植民地獲得国・植民地を持たない「利権」のない国

宋主国が残した遺産、後遺症(ルワンダ)

w 以降の独立した植民地<

選択したイデオロギー(カンボジア)

冷戦と呼ばれた現実

大戦中、米ソは協力(独、日相手の戦争という条件)しながら互いに不信感をいなく

戦後

)社会的、政治的体制の相違

)占領地をどう分割し、どう管理するかという実利的問題

世界はふたたび異質なふたつのブロックに分割

- ・政治，経済，文化，および軍事のあらゆる面での2極化（キューバ危機）
- ・大国どうしは実際に砲火を交えることはない『ストレス』時代（朝鮮戦争，ベトナム戦争）
- ・政治的な覇権の争い＝「友と敵という区別」という言説 政治的決定はなされている
なぜ二つのイデオロギーは対立しなければなかったのか？共存への選択肢はなかったのか？

冷戦下での核戦略

核戦争自体は政治の継続ではない 使用した国自体の存続さえ危ぶまれる

『核抑止論』 つねに核戦争の危険性があるという政治的駆け引き＝核武装の正当化
発展

『相互確証破壊論』 核攻撃を受けても報復により相手にさらなる核使用を思いとどまらせる＝核の
限りなき増強

「核抑止論が実際に機能するか否かは明らかではなく，議論を呼び続けた」

米ソの歩み寄り<冷戦の終結にむけて>

- ・INF, SALT などの外交
- ・イラク制裁決議の欧米案へのソ連の賛成 冷戦の終を告げるもの・ソ連の解体＝核の拡散（印・パ）

冷戦下での核管理理論がきわめて場当たりので，貧弱であったため，冷戦後もなお核の恐怖は継続・増大

2 内戦とジェノサイド

戦争の新しいカテゴリー

- ）二極化世界の枠組みの消滅つまり「イデオロギー」から「国家」へのシフト
- ）アイデンティティの解放（民族，ナショナリズム，エスニシティ）
- ・かつては諸民族の連合体であった国家（想像の共同体）が脱植民地化・冷戦により生じた『政治空間』

で諸民族がひとしくナショナル（世界社会のシステムの一部）であろうとするところに戦争の新しいカテゴリーが生まれたのではなからうか？

ルワンダの例 “つくられた人種主義

ゴビノーの人種論 解剖学的に人種を捉える 優劣民族の混合による優性民族の退化 劣等民族の絶滅

植民地支配者がしなやかに混合していたツチ・フツの社会構造を支配・被支配 歴史・民族の政治的

歴史，民族の 造により脱植民地化した国家は不完全な国家になり歪んだ国家になる

ジェノサイド行為 深刻な大量虐殺（死者 20 万人 50 万人）大量の難民（240 万人を越える）

アフリカに対する偏見+的確なルワンダジェノサイドの分析不足によりジェノサイドの言葉が曖昧になり国連のPKO派遣に対するアメリカの抵抗。

カンボジアのジェノサイド “翻弄された国

カンボジア ・アンコールの末裔・タイ，ヴェトナムに囲まれ境界地帯を浸食される

・1853年 フランスに保護を求める = 自ら植民地になる (1953年には王国として独立・シアヌーク王) カンボジア独特の統治法

・反王政のクメール・ルーージュ 北ヴェトナムに接近，中国をモデルとした改革 社会主義的イデオロギー

・1970年 アメリカの背景により首相ロン・ノルの軍事クーデター 民主主義的イデオロギー
一つの国家内にあらゆる大国の思惑 (イデオロギー) が集結 = 代理戦争

1975年波尔・ポト派のプノンペン制圧

カンボジアで行われた虐殺のタイプ

) 政敵の抹殺) 自民族の抹殺) 少数民族を対象とするもの

カンボジアにおける戦闘には大国の間接的軍事支援があった

国連においてジェノサイドとして認められなかった 認めることは大国自体の責任もみとめることになる

おびたしい人々の受けた痛みは国際システムにより抹殺される結果となった

3 連邦の崩壊

バルカン半島 典型的に多民族，多文化にもとづく連邦国家の内部矛盾より紛争が多発し絶えず境界線が引き直される

近年は強力な指導者チトー緩やかに結合 (自主管理社会主義，各共和国の分権化—ソ連とは一線を画した社会主義国)

1994年の内戦の主な原因

) 強力な指導者チトーの死) 経済不況) 大セルビア民族主義の誕生) セルビア人の人口分布図

最も大きな原因のひとつとして国家内の民族均質化と民族文化 (政治的にはナショナリズムと民族主義) の衝突ではなからうか？

内戦ははたして民族の均質化だけで説明できるのか？

内戦の複雑化

・ヨーロッパのスロヴェニア，クロアチアの独立承認 修復不可能な状態に

・セルビア人 = 悪の権化 イスラム系ボスニア人 = 殉教者

各共和国の民族均質化+外部世界つまりヨーロッパのキリスト教国，イスラム諸国などからの強力な政治的，軍事的

支援が加わりバルカン半島の戦いは世界的な意味を持ち始めた。

4 新しいタイプの言説

『サラエヴォ旅行案内』・FAMA 機知にとんだポエジーがあり，市民の的確な状況認識がされている
・戦争反対はもっと真剣にやるべき？

これまでの反戦平和論の限界は，戦争をこえる思想の水準がなかった

「サラエヴォ旅行案内」には，反戦のスローガンもないだけでなく言説的に民族主義からもナショナリズムからも完全に

逃れている

紛争の内部での言説とは異質な言説が必要

サラエヴォでは文化的サヴァイヴァルが続けられていた

・演劇，音楽会，書籍の出版，大学の講義，スポーツ，私営ラジオ局の開設，新聞の発行，弦楽四重奏団，そして劇場は
二つ機能していた

サラエヴォ市民はこの種の言説により歴史の現在を生き始め，未来を生き始め，破壊のなかからきたるべき未来を想像
する能力を持ち始める

第5章 20 世期末の戦争

1 あらたなタイプの戦争

NATO 軍がユーゴのコソボ自治州，ベオグラードへの空爆を開始する

・どこから湧いてくるのか分からない不安，いまだ経験したことのないユーゴ紛争をどう感じたのか
多くの識者，ジャーナリスト

：セルビアによるコソヴォでの「民族浄化」，膨大な難民流出，空爆の現状

：ユーゴ大統領ミロシェビッチを悪玉に仕立て上げる

：民族浄化の生じたユーゴの歴史的解説

一般の人々 = 両義的

：ユーゴの非人道的な圧迫への批判

：NATO の空爆に合法性が欠けていたことへの批判

ユーゴ空爆の問題点

)「民族浄化」に対しては，最も中立，公正でジェノサイド条約に合意している国連にこそ武力行使の合法性があるのでは？

・国連はコソヴォ危機解決のイニシアチブをとることができなかつただけでなく，人道的介入を理由

にした武力行使の正当性問題さえ議論できなかつた。他方、和平後の復興救援では全力をあげて貢献している。国内紛争への関与形態を考え直すべきでは？

) EU と米からなる軍事機構：NATO にユーゴを攻撃するいかなる正当性があったのか？

・次項、まとめにて

) 軍事施設を対象を絞った空爆は、目的にかなっていたか？

テクノロジーのゲーム

・もはや戦争は相手国全体を目的としない 兵器の電子レベルの向上=兵器の費用の向上、寿命の短縮

ひとりの人物をあいてに膨大な兵器を投入して戦争する必要性？ = 米の副利的な目的があるのでは？

・非戦闘員を対象にしない ミロシェビッチは、まともに戦争すれば勝てないことを十分に承知して民族浄化をやめるところか強化 = 間接的な非戦闘員への影響

目的はユーゴの戦力、民族浄化の停止？

新しいタイプの戦争に向かい合っていた

2 バルカンとヨーロッパ

ヨーロッパの言説

バルカンはヨーロッパである、彼等はそこで生じた暴力沙汰の危険を察知し、バルカンがやがてヨーロッパ（想像の共同体）に落ち着くにはこの危険を取り除かなければ = ヨーロッパの地政学的言説

このような言説で構成した現代の政治的世界こそ、現実的可能性としての戦争が起こる場では？

世界的な規模の危機感が欠けている

ユーゴ紛争はつまりはグローバル化した資本主義のシステムや情報の流れの中で生じた戦争

・グローバル化 資本から文化にいたる領域での圧力 欧州中核諸国は圧力に適応する道の選択 = 欧州全域の安定した政治、経済的豊かさ

□ グlobal化（地球全体の相互関係化）により危機の世界的拡散を招いた

3 あらたな帝国（インペリウム）の登場

EU とアメリカ

アンダーソン 国民国家は「想像の共同体」 この言葉が国民国家とは別のものを指す時代に

世界は国民国家、それらの関係よりも上位の政治的、経済的統合を必要 EU

・NATO とユーゴの戦争 EU がひとつの権力として機能することの証明

・NATO にとってのこの戦争の合目的性は、EU の想像された版図内でのジェノサイドの制圧

戦争の主体はEU ではなく、米を主体とする NATO

なぜアメリカがこの戦争の主役か？

「共同体」という政治モデルはひとつではない

- EU の上には，NATO を介してさらに大きなインペリウム = アメリカを中心とした世界全体の政治的・経済的・軍事的統合のシステム（ヨーロッパの NATO 化）
- 軍事力は大西洋だけでなく太平洋にも向かっている（日米新ガイドライン，周辺事態）

地球規模でのインペリウムの維持は不可能

- ・アメリカの外部はあまりに多すぎる（とくに完全に外部にあるイスラム世界）

未知の戦争

- ・バルカンの戦争 現象としてよりも，戦争そのものの発生する条件にみちなるものを含む
- ・世界は決して戦争だけでなりたってるわけではない 歴史の現在に対する認識が重要

世界が，これまで知らなかった戦争の可能性に開かれてしまったのは確

かであり，戦争にあたらしい様相が見えてくるのはこれからである

□

むすびにかえて

当初自分は，ユーゴ紛争を欧州諸国が EU として政治的，経済的（ユーロ貨幣）に統一していこうとするとき，全く逆の動きをみせるバルカンに EU のこれからの信頼をかけて介入したのであり，そこにグローバリゼーション，新世界秩序を掲げるアメリカが国力の優位性の誇示のために NATO を主導したのではないかと単に紛争と世界経済のグローバル化を関連づけていた。

しかし，本書を読みいろんな参考図書を読むうちに，多くの疑問を感じた。

- ・旧ユーゴの紛争について西側メディアのセルビア民族 = 「悪」というあまりにも極端な単純化。
- そして 94 年の国連制裁は西側メディアのそのようなイメージを世界に承認する形になったので？
- ・国連はもはやアメリカのインペリウム権力を押さえることができないのではないかと？
- ・連邦国家の解体はクロアチア，スロベニアの独立から始まった。このふたつの民族主義は美化され批判されることはなかったなぜ，セルビア民族主義だけ裁かれるのか？
- ・いろいろな形で表現される冷戦とはいったい何だったのか？
- ・民族紛争とは，人間の魂にふれるものであるとし，その傷も深いものになるとするなら，誰がその傷を癒していくのだろうか？